

## 第4回 点ける

ソ連に連行されたのは夏だったため、抑留された多くの日本人は防寒着を持っていませんでした。

そこで、ソ連軍は旧満州の倉庫から日本軍の外套（コート）などを運び出し、抑留者に与えました。しかし、それらの衣服は厳しいシベリアの冬には十分ではなく、命の危機につながりました。

そこで冬の作業の合間には焚火をして暖を取ることがありました。火を点けるためには、マッチなども使われましたが、マイナス30度を下回る環境では、マッチで火を点けることは簡単ではありませんでした。マッチがない場合は金属の破片と石、綿製品などを調達して石と金属片を打ち合わせて火花を発生させて火をおこしました。

また、抑留生活で暖をとる目的以外にも、ソ連側から支給された煙草を吸うためには火を使う必要がありました。

今回は、生活に必要であった自作の着火道具を紹介します。

### ○ 火打石



右の火打石は収容所の近くの山で採取し、左上は木綿糸の束を金属筒にいれたもの。左下は火打石をたたき金属片です。金属の部分は工場で作業している戦友にもらったそうです。

### ○ ライター



工場で作業に従事していた時に作ったものです。側面のネジを開けてオイルが入るようになっています。